

蒼い地帯

北丘冬志詩集復刻版

20才時の処女詩集

製作期間…17歳-19歳

1970年1月15日発行

宇宙は雨に濡れて

序奏

宇宙は雨に濡れて・・・

あなたの胸の大理石柱はみず色に光ります

(天を観る幼児の瞳孔が私の胸にぽっかりと開いた)

けれども死骸はどこまでも続いているのです

植物の死臭は天に登ります

あらゆる死がある、雨は注いでいる・・・

ああ、あなたの硝子の乳房を戦慄さす

こすもぞーん大宇宙線の驟雨！

あなたの手中の吐息は、宝石でいっぱい

*
+

宇宙は雨に濡れて・・・

お話はここで尽きてしまうのです(いつも)

道はどれももう草むらとなって

でも雨は注いでいるのです

ああ、宇宙は永劫に雨に濡れて

朝日は沈んでいく

夜は終り、朝日は沈んでいく。

春の果実は処女の乳房のように

この眠れなかった少年たちの、横たわる

海色の暗い平原を凝視しています。

一定程度の愛を込めて

夜明けのスキヤットは誕生し死んでいきます。

沈んでいく朝日！！

都会の額は湿っているようで

実は何も変化はない、

それは何て哀しい

逃走したのは始発電車でしょうか

けなげな新聞少年、でしょうか

それとも最後の野良犬？

とは云ってもあの少年たちは

今から眠る訳ではない、

あの果実をいつの日か把握する

そんなことは幻想であると

誰もが知っていますのです。

実に何も存在しない世界がみえてきて

朝日を愛さずにはいられないのです。

今、夜はすっかり終り

朝日は沈んでしまった。

(夢)

夜光虫の大群が押し寄せて
眠れぬ漁師の舟唄に
目覚める夜半の夜の深さ

(ああ昨日は永い夢だった
白い砂上を歩いていたら
遠い沖で呼んでいた
落日の中で呼んでいた
僕は知らないふりをして
自分の内面をみつめていた
内面の深い暗闇に
星の光を探していた)

ぎいぎいぎいと果てもなく
漁師は舟の櫂を漕ぐ
夜光虫の大群の直中を
眠れぬ漁師は漕いでゆく

(ああ夜明けは遠い
海はあまりにつめたい
夜明けはもはや来ない
今一度夢を見ずには
今一度夢を見ずには)

夜光虫の大群よ流れ去れ
やがて波間に消えて散れ
漁師の舟唄やむように
漁師の舟唄やむように・・・

ステージ*

饒舌街道の後向きの主演者

その手にもつ空白を暴露け出せ
然し振り返ることはせずに

舞台（ステージ）には後向きの
演出者穴を探して這い擦り廻る

拾円硬貨は笑う

破綻した天よりの散乱する宇宙線

陰画はイメエジアップする

からまわる風車

「 「

喪失とは存在のシノニムであると

噂の男は登場しただろうか

光源はいつも水源である

酔いどれバロックは変身せよ

コウモリ男は変身せよ

〈毛髪は変身せよ〉

何も聞こえないがたしかに

誰もが怒鳴っている

からまわる現在

天を指すことは終った

冬は終った

（そして再び来るともいう）

依然として輪廻は直線なのである

矢印は変換せよ

いつになっても矢印

行く←来る→

現在から現在へと彷徨する

偽りのモニタージュ

口に手を押し当てて

その手を束縛することをせよ

心臓を透明（クリア）にして叫ぶとき

男は飛び出す！

だがこれもまた後向きの背中

その手は自分の手を手に把み

朝食のフォークを待っている

何という直線的な食器！

盛られた瞑想は滞る

喉の奥に突つかえるメデイテーション

吐き出そうと思えば飲み込める

その時也从らまわる風車

「

シンフォニーは朝に沈没する

まるで蒼い朝日の形相のように

幼児の瞳孔を通過して沈んだ

やはり舞台の断層へと

張り裂けるカーテンコール

なぜに後向きの背中

飽くまでもからまわる風車

からまわる現在

煙Ⅱ霧であつても夢幻ではない

特に女はの咽喉より立ち登る

あのオーガスムについては全く

その通り！

地面は掘つくり返されて

もう空と変わらない

空白を埋没するには空を閉ざせ！

だが幕はもう透明になっている

そのことに気付いたのは

一体どの観客だったのか？

乾いた義眼

茫洋の砂丘

色彩喪失の海平原

石像や墓石や涸れた貝殻

そして、風に消された足跡

あれから見たものはただ

遙か水平上を曇らせた

どす黒い蝗の大群

ああ、ただそれだけだ

あの把握できない遠方の

煙の移動

滅亡への飛行群

ただそれだけだったではないか！

既に時計も役立たぬ程

久しく潮は繰り返され

この手に取り出してみる義眼も乾き

石の如くに風化されていく

いつかは砂上に風に散り

失われるだろう、しかし

失われていくものはいったい

何だと云うのだ

実際何が失われると云うのか！！

茫洋の砂丘

色彩喪失の海平原

石像や墓石や涸れた貝殻

そして、風に消された足跡

風に消された

足跡

追悼詩・蒼い地帯

Y氏が殺害されて遺棄されたままの
この神経質（ナーヴアス）なる蒼い地帯は
その把握しきれぬ曖昧なる実体故に
白亜のエンタシスを建てよと命ずるのか！
ああそれは欺瞞的美化の行為にすぎず
その無意味なる発想はメガロポリスへと葬り去らねばならぬ
或る時落下してきた顔のない操り人形（マリオネット）は
その繊細なる糸を断絶して速やかに焼却せよ！
「天上は軽薄なる神神の狂宴で混乱しているのだ！」
ああもはや何をも存在させず封鎖するのだ
そして錯乱の現在を極めて衝動的に隠滅し
いびつに変形した太陽球を呼び戻すのだ！
（その前に）
見よ、この蒼い地帯に月が登ってゆく！

注… Y氏とは高校時代の親友山本富雄氏である。

実際に彼が殺害されたのではなく私のイメージでは彼は思想的に
殺害されたと感じていた。

四月の幻想に纏わる四つの章

真昼の祭壇に関する未完の章

青空の上の垣根は何ですか

(ファンタジアは流浪する)

碧という次元は喪失に通じる

冷え切った天体への憧憬は処刑される

なぜにあれらの空白は蒸発したのですか

(黝んだ虹の映像?)

旋律は風によって排泄される

偉大な感覚器官は蝕むことが好き

昇天の群像は連続してつづく

その究極には何が存在しますか

(祭壇?)

言葉はひとりで遊んでいます

呪文は虚しく徘徊しています

いばらの垣根の周界を

失われたものは行くところがない

どこへ行けばよいのですか

(?)

ああああ、のっぺらぼうの正体は何だ

発散した事象はどこへ行くのだ

条光の浮遊はどういう意味だ

神話を愛する聖女は云った

(すばらしい永続!)

まったく、終了しないことは美しい

しかしあまりに美しすぎて

涙が溢れてきてしかたない
祭壇は朧な果てに隠遁してしまう 未完

午後の洗礼

あの楡の木についてはもう語るまい
という光沢の破綻した午後だ
あらゆる霞に包囲された春だ
洗礼は行われている。
と言いつつ残して去った女の吸い殻だ
つまらぬ詩人たちのうなだれた行列だ
萌えるのは草だけじゃない
終了しない処女の放尿に
バランスは失われている
この湿った土壌について想う
というささやかな肉情を
つる薔薇は刺殺している
と思つたのは単なる記憶にすぎない
豊満な怠惰の発芽はつづく
春の乳房より偉大なる心象よ！
これは、と云えば全くの真実なのだ
つまり、洗礼は行われている。
幾許かの刻みを通過すれば
もう一度会えるだろうか
あの女とあの女の失言とに
内包した胎児の陰核に
再び発芽はもたらされるだろうか
だが行ってしまった
浮遊する桜の臭気はなぜに
あれらの雲を生産したのか
とはさまよえる動機（モチーフ）であり
結論でもあるとは、

ああ、もう語るまい

実際すべては終了しないのだ

「洗礼は行われている。」

目には（口には）

目には黄疸のデンデン虫を生産している

口には充血した性器だ！

背後には醜悪な貧乏絵描き

とその情婦、空には

宇宙人の魂、光る

きらきらと燃えているんだよ

隠れちゃいけないよ、情愛の概念

君は脳細胞を露出して

いかにあのアカシアが性的に露出

しているかを教育せよ

ミドリ色の恋人が浮かんでいるよ

ふらふらと漂っているよ

不思議な春だなあ！

マーマレイドを口の周囲にべっとり

雲はべっとり泳いでゆく

黄金の楽隊が麦畑で排泄している

並んで、並んで、並んで、

どうしたの？みんな胸が膨らんで

満タンだ。

僕はもう遠慮しまあす

ああ世界はお休み

みんなでお休み

教科書は真っ黄色になってポストから飛び出す

雲よりも散乱する

掴みきれないポリウム

あの子も大人になったのかなあ

溢れ出た蜂蜜は舌を硬直させる
血走った太陽が真上で旋回する
目にはデンデン虫口には性器

曇った春の瞳孔

湿気が発展して天は桜の花散乱です
足の露出した淫乱な女神が寝ています
あ、滑ってしまった！

饒舌に沈没した現代の十二神

彼らの性欲は曇ってしまった望遠鏡
みえない、みえない、みえない・・・と
鉛色のリボンが悶えている

あれらはスカートを翻したがる都市の女
空気の瞳孔をもつ生物たち

遠い女像

曇天

ゆく、ゆく、ゆく、・・・

警官の服を着た娼婦の足

コンクリートの貞操帯をぶら下げて

はしる、はしる、はしる。

〈ハイウェイは転倒したまま〉

プラスチックのビルはハンドルをマワす

ハイウェイは終了したいと願う

曇った瞳孔はアスファルト上に開いている

消失するスピード・メータ

（空港）はどこだ！

あの天の子宮を把握できるのはどこだ！

ああ、ああ、ああ、

応えるもの

ない

初期詩群

高校2年から浪人時代の作品

一 水色への哀愁

黒い樹間の朱い珠

葉っぱを失くした

大きな二つの黒い樹の間に

何やらふわふわと浮かんでいる

あの朱い珠は何でせう

あの朱い珠は何でせう

さうですあれは

きのうミケが戯れていた

あの赤い毛糸玉なんです

ああ金色の空の中に

あんなにも愉しさうに

ふはふはと浮かんでいる

あれは赤い毛糸玉なんです

沈む夕陽ではないのです

さうですそして
しべりやおろしの鳴く頃に
きつと真つ赤なセーターになつて
私を暖めてくれるでせう
きつと暖めてくれることとせう。

死人の顔

生臭い漁村の岩陰で
夕陽が蒼ざめている
波の音もとぎれとぎれに
耳の奥でのたうちまわる
滑らかな感触が
首のあたりを伝わる
灰色の瞳孔はもはや
開ききつたまま笑いもしない
それでも微かに濡れている
その冷たい唇に触れたとき
夥しい数のふなむしが
にわかには騒ぎ出した

春宵桜

蒼白い朧
女の長い髪
くたびれた麦穂
死に絶えた池の水

それらを風が震わす
この暗い春の宵に
夕陽など存在しない
ただ桜並木が続いている
私の眼前より無限の暗闇へ・・・
ああその淡く浮かぶ白い花弁は
混乱した紙屑のようだ
白い紙屑のようだ

蒼白い朧

女の長い髪

くたびれた麦穂

死に絶えた池の水

それらが消えていく
この暗い春の宵に
私はその残像を否定しつつ
この憂鬱な桜並木に
ひとつひとつ火をつけてゆこう
錯乱した春の花に火を着けてゆこう

東京砂漠の伝説

いつからか
東京砂漠の真ん中には
不可解な石像群が
何も云わずに立っている、
それらの虚ろな眼は渴き
遠方をみつめているでもない。
まして自らを見極めてなどいない。

そして時折吹き荒れる砂嵐にも
それらは鳴きもせず
無関心を装い
ただ無口に立っている
ただ立っている。
ああ、案山子よりも孤独な者よ
汝らこそは文明の遺児なのだ！
哀しい石像群よ。
だのに貧しい隊商達は
なぜに手を合わせてゆくのだ。
オリエントより亡国への使者よ。
いつからか東京砂漠は砂塵のために
空を失ってしまった。
渡り鳥も寄りつかなくなった。
けれどもそれら石像達は
自身の亀裂を
崩壊から維持することで
精一杯なのだろうか。

水色への哀愁

メガロポリスの呪われた吐息のもとに
おまえは逃走させられた
かなしくも。
わたしは取り残された
ああ北欧のフィヨルドが恋しくとも
少女よ。
その瞳にはもはや
憂鬱なブルーしか映らない
夜明けに去る。

わたしは取り残された
朝のオアシスは蜃気楼にすぎず
マシウの水さえ濁り
メガロポリスの爪は伸び
おまえの頸動脈を切り
溢れ出た血の黝さに
かなしくも。
わたしの嘆き奏でるのは
水色への哀愁である。

夜はうたわない

幾億年昔と同じ石に腰かけて
悲しそうに顔をしかめているのは
うたわない夜の影である。
そしてその背後に背負っているのは
安らぎでも希望でも何でもない。
ただ空虚な闇だけなのだ。
夢だの星だのとは
人間のこしらえた他愛ない虚構にすぎない。
まして水色の太陽球の浮上は
単なる必然ではないか！
だから夜はうたわない
ただ悲しそうに顔をしかめている。
そしていつかその姿を見たいと願ひ
真昼のように明るい電灯で照らしたら
もうそこには、夜はいない。

太陽への航路

顔をそむけてはならない

あの錆びた球体は、ああ

太陽であることは真実だ！

観念の彼方で否定している

あらゆる真実はもはや

おまえを欺いたではないかと！

だがやはり顔をそむけてはならぬのか

日没が幾度繰り返されようと、ああ

舵は固定されてあの錆びた

太陽への航路

しかないのだ！

二 絶望の奏でるエレジーたち

灯籠流し

墨汁のようにどす黒いこの川を
無数の灯籠が流れてゆく。
厳かに緩やかに漂い流れてゆく。
夏の夜の暗さを嘲笑い乍ら
灯籠は静かに流れてゆく。
ひとすじの道となって
ああ、いったいどこへ？
誰も知りはしない、ただ
遠い、光が集まるところへ……
私をひとり取り残したまま
……行ってしまった。

夜の郊外電車

夜の郊外電車は寂しい空間。
光の流れる都会から帰るのだ。
深い深い闇に包まれた我が家路を。

夜の車内は黙殺された場面。

話すことを禁じられたただただ長い時間。

ああ、暗い蛍光灯の下の蒼座めた蠟人形の列よ。

おまえたちも同じ仲間なのに。

色彩かな光の幻覚にもてあそばれ

すべてを喪失し疲れ果てた同じ魂なのに

なぜにそんなにもさえぎられた

ぶ厚いガラスの向こうで瞑想しているのだ。

白っぽい光に包まれた異次元の

手の届きそうで遠い遠い世界に

ああ虚ろなるまなざしの仲間たち。

これは悲しいことだがもう誰もが

そう思わなくなってしまう。

その事実こそはもっとも私を悲しめ

放心させる程に失望させたのだ！

けれども今この電車は我我を共に乗せて

懐かしい家路を走ってゆくのだ。

深い深い闇の中をその轟音は

遠い昔に帰ってゆくようにも

そんなふうにも聞こえる

事実、遠い遠い昔へ、永久に到達できぬ駅へと

夜の郊外電車は走ってゆくではないか！

我が共に哀れなる仲間たちよ。

夜の郊外電車は寂しい空間

光の流れる都会を忘れて帰るのだ

深い深い虚脱の中を、我が家路を。

曇った鏡を拭いてみるには

不気味な長い夜、冬の夜、
霧も降らない、木枯らしも吹かない
春を待つ生物も衰弱しきった夜、
曇った鏡を拭いてみることはなぜに禁じられた行為なのだ！
いったいこの夜の長さを知るには何の術もないじゃないか！
ああ、おまえはいつからそんなにも
殺漠の枯野を映す乾いた眼で
冷たい亡霊を追い続けるのか
失われた青春の亡霊が逃げてゆく
全ての繁栄、全ての満足は、
誰が創った虚飾だったのか
後を見れば長い夜
曇も降らない、木枯らしも吹かない
鏡に映る血の気の冷めた男の舌は
実は曇った鏡を嘗めたくても
乾いてなんかいやしないのだ
けれども眼だけは乾ききって、追い続ける
連なる闇という名の亡霊の背後を
でももう、追ってはならない追ってはならない
追ってはならない！
外は曇も降らない、木枯らしも吹かない
春を待つ生物も衰弱しきった
無意味な長い夜、冬の夜
おまえは永久に帰らないだろう
鏡の背面世界へ陥ったように・・・

昨日に寄せて

この暗闇に手をさしのべて
ああ、うたっておくれよ！
少女たちはその合唱をときれさせずに
この世の何よりも透明な唄を！

その冷たい笑い声のように
でも、一体何があったのだ？
みんなどうしたのだ！
この暗闇に微かなる余韻さえも残さずに
冷たいおまえたちはどこへ去ったのだ
置き忘れた時計の刻みが咽び泣く
もう昨日という日はノートの空白に存在するだけだ
みんな行ってしまった、遠いところへ
あをじろい月に光に映える
ノートの空白がやけに目に沁みる

秋の瞑想

秋の心象がくろずんだ葡萄腫に浮く頃
私の目の間に並べられた悲しい顔たちの
その神のような静けさに彼ら自身驚くのだ。
これは煉瓦色の秋の創作、そして、
やりきれぬ秋の溜息・・・
今、私は冷たい碧空が見たくて、
閉ざされた小窓をこじあけてはみたが、
ああ、もはや秋の絵画は盗まれてしまった。
冷明なる太陽球はあまりにも欺瞞に満ちているではないか！
私は満足することを失ってしまった。それゆえ、
もう無気力な瞑想家にしかなれないのだ。
だが甦り来る追想だけが私を楽しめるのは
尚更秋の存在を虚しくするだけなのだ。
ああ。すべては忘却すべきだ！秋の概念とともに！
だから私は一枚の枯れ葉を拾ってきて、
うまくない煙草にして吸ってしまった、あの味気なさよ！
これからは残された煙の息苦しさの中で
ああ、秋の肯定的な落日を愛する傍ら、

私はこれらの悲しい顔を刻むのだ、秘かに。
そのとき心臓を流れるこの冷たい血液の
漸時的な感触の鋭さに耽溺しながら
いちしか必然的に私は秋を失うだろう。

ある覚醒

おまえがわたしを呼んだとき、私は、
夕暮れの湖水の畔で、
遠い昔の宗教家たちと
何だか訳のない話をしていたのだ。
それは神々の噂のようでもあったし、
無意味な妄想のようでもあったが、
私は何も覚えていない。
おまえが私を呼んだから
すべて忘れ去ってしまった、夢みたいに。
おまえの立っていた背後には。
背の高い樹木が風に踊っていた。

排泄と喪失

晩秋の落日には金色の瞳孔があり
必死に何かを排泄しようとしていた
それは人間たちの涙のようなものだろうか
落日の内面はびっしりとぬれているようにも見えた
だが時間の流れに寛容はなく
胸いっぱい悔やみを残したまま
すべてが喪失へと移行してゆくのだ
だから落日は、もはや諦めきって
結局何もせずただ見つめていた

枯れ枝の真っ赤な柿の実ひとつを

それゆえそのまま落日は喪失されるのだ

(その悔やみはやがて、水色の朝に忘却されようか?)

真夜中のエアポート (逃亡)

真夜のエアポートに

秘やかに身を横たえているのは、

8の静寂を追求しているあの、

銀色の機体だけなのだ。

そして今それに搭乗しようとしている私。

——— いったい私はどこへ行こうとして

あの錯乱から脱出してきたのだ。

なぜに背後の光の羅列を振り返ることを

自ら禁じたのだ? (ああ)

ここは真夜のエアポート

星座は美しく耀いてくれても

この暗い送迎 DECK には誰もいない。

そして朝までは不休の夜……

数知れぬ照明灯の群よ!

それらがどんなに明るく耀いてくれても

この暗い真夜を白昼にすることはできない。

(その逆はできても)

そして真夜のエアポートを支配する

恐ろしく巨大な黒い空間に

ただ身を横たえているのは

8の静寂を追求している

あの銀色の機体だけなのだ。

そして今それに搭乗しようとしている私。

——— 憧憬と厭飽との交錯。

ああ、もう離陸の時刻だ！
私は至急この東回りに搭って
未だ見ぬ葦色の夜明けへと、急ごう！

三 リリカルな神話 「聖女たち」

秋の蝶

秋の蝶は

白くなければなりません。

水色の空を

彷彿として漂う

白い幻覚でなくては。

ああ私にはそれ以外考えられません。

それゆえ秋の蝶は虚構です。

透明な心より生まれ出た

純白な飛沫でもあります。

氷の一片でもあります。

ああそれは、冷たい空が憂いにみちた

小春のある日に舞うのです。

心の奥では泣いている

冷たい碧空の中を

高く

低く

舞うのです

何という美しさか誰もが知るのです。

秋の蝶

秋に生じたこの美しい空白を

決して虚しい追憶で埋めてはなりません。

秋の蝶。

秋に生じた美しいこの空白を

決して空しい追憶で埋めてはなりません。

秋の蝶。

ああそれは秋に生じた一点の

純粹な

空白なのです。

忘れられた病室の少女へ

(こんなにも空の美しい秋)に

僕がどんなにか僕の蒼ざめた心臓を

君の抉られた眼窩に入れたがっているか

裸銀杏の並木道を通るたび

僕は秘かに然し強く認識するのだ。

ああ君の周辺の蘭はあまりにも

僕の破産した概念空間では

虚弱すぎるイメエジにすぎない

しかし君自身はもはやその日常性の

枯死してゆく実態を常にはつきりと

予言することができるのだ!!

ああ僕は人知れず呪う

この秋のしらじらしい明るさを

優柔不断な太陽円を

そして色あせたブドウ酒の妄想を。

しかし僕の殺人未遂は既に
抹消された幻想の断片として
あの冷たい碧空に吸収されてしまい
僕は極めて第三者的に
この事実について述懐できるのだ。

一体それでいいのか？
忘れられた病室の白い壁の内面で
永遠に僕に呼びかける人よ！！
秋深まると僕の罪悪感と共に
女の顔を刻む作業において
かつて君の顔を刻むために流出した
僕のかなしい血液の行方を
君は知っているのか？

冬の原点

冬の石灰質の夕陽は
遠い原野に浮かび
この枯れ果てた
三次元の庭のどこかで
きわめて植物的な
女のような生物は成長し
ただ秘やかに呼吸し
疲れ果てた旅人の
パラドクスのな衝動は
冷たい大気となり満ち
この庭を戻り遙かなる
非合理の暁へと
水晶色の雪のヌプリと
凍結した湖水の底へと

沈めてしまった現在
冬の刈り取られた野原で
北へ行くエホバの群を見た。
ああ旅人は疲れ
無為なる憧憬は捨て
この冬の原点へ
透明なる一点へと
帰って来るのだ今こそ
追憶を遮断し
未来を黙殺して
すべての旅人は今この
冬の原点に帰するのだ！！

冬の空（・）海へ

（一）

冬の空を拝むとき
記憶を喪失せよ樹木
その神経系のみを肢体を
冬空の究極にまで伸長せよ
果てることのないガラス空間を
その感覚系により支配せよ。

（二）

冬の海が見たい
という欲望は形象化した
わが脳室内でオブジェ化して
発展しないことは哀しい、事実
冬の海は存在した
それは遠い夏の（あの海は帰った女）

の血の気のさめた胎内に
瑠璃色の平面が
あらゆる理性を内包して
存在していた
「淋しい受胎の季節」

白い朝の聖女像

この世の繁栄の
実は何もない
ところに
淋しいリラの花弁が
風にも揺れずに
ただ存在するとき
冗漫な朝の朝食に際して
口ずさむ食器の
盛られた記憶を

渴いた食道へと
流し込んでいる
白い朝のこと
君はいつたい
どうして僕を殺せずに
その齷のフオークで
僕を刺殺せずに
行ってしまおうというのか
ああ

この白い朝のこと
君のイメージは凍っている
呪わしい大気の固定に
苛立たしく狂う

僕は君を犯そうと
あらゆるフォークを投げつけた。

四 イマジネーション・都市1970

幻想都市

赤い喫茶店で

女の吸った煙草は美しい

お、お、美しい煙立ち上る

風が風刺した都市

おまえは心臓をひけらかせ

メガロポリス70は静止せよ

ステージは招く

何でもない立方体

(メガロポリス70は発動せよ)

茶色いステーション

は飽和した卵を抱え苦しむ

固形の発情体は離陸せよ

失われた文明論は翻る

まぶしく雲はゆく

「C」まであと零キロ!

ガードレールは錯誤する

没!没?没!

(合成樹脂のオブジェについて)

成長する非生命体

方向は合成される

奇妙な方程式を翻弄するのは

赤い喫茶店にいた

あの女の

胎児

だ

㊦ 通りの悲惨な青春

ビニール袋の中で飛んでいるのは何ですか

と尋ねる顔のない老婆の引きずる曲線は

㊦ 通りを遙かに消えてゆく……

雨は降っても埃か霧の宇宙線

碧空の幻影を追跡する音楽は

絶やしてはなりません……

淋しい時には踊りにゆこう

㊦ 通りの道標がさみしく誘う

あの電柱の背後で少女少女は何を

しているのですか？すべては電柱の陰

いつも何の原罪も見えません

しかも六月は近い！

暗い日曜日は毎日やってくるし

実際何もかもが毎日やってくるし

でもそいつは大した事件じゃない

それはこう叫べば片づくことです

<滅亡してゆく全人類よさようなら！>

なぜに滅亡？どこへ行くのか？

でも答は決まっているさ

このビニール袋の中でとんでるじゃないか！

もうひとつの夏に寄せる追想

この白い記憶の都市において
海について問うことは終った
イメージネイションは夏になっても
アポロンを追跡することは終った
タンポポは薊には変身しなかった
アスファルトは流動しなかった
産卵したのは誰でもなかった
ただ恥骨の樹木と陰毛の雑草
貧しい節足動物たちの
ジャズは息苦しく排泄している
空は水面を映しています
しかし渴ききったクリエーションにすぎない
なぜにこんなにも乾いた土壌
なぜに〈夏〉
ああ空は水面を映してはいます
けれども渴ききった水面に映る
都市は形骸にしかすぎない
夏は形式にしかすぎない
しかも無意味な形式
そして全ては終った
この白い記憶の都市において
すれ違うイメージネイション
すれ違うクリエーション
失われた夏状突起は
冷たい都市における
冷たいく夏でしかない
ああ何という都市の夏！

太陽は健康的に病気をしています

それは全く病的なカフェテラス
で口にしたミルクとコーンスープと
朝霧のバラ色の精液に
少女は哀しみを胃袋に流動させながら
走っていったであろう美しい日日よ
太陽はカタツムリの模様を印けて霧に浮かぶ
ああ都市は何にも孕んじやいないのさ
でも孕まれている

(誰に?)

少年は詩人の素振りでも新聞を抱えて走る
朝です

霧です

なんて第三次元の美しい情景

偉大なる病気の情景

太陽、浮かぶ、プラスティックの、

昆虫は産卵する、

銀杏のアベニウ

枯れてゆく、ああ！

私はいつまでも傍観者ではない
実に、

太陽は健康的に病気をしている

実に、健康的に

私は飛び出すだろう

病的なカフェテラスから

アベニウを、

灰色の舗道を走る

クチビルのブティックは紅く走る
目玉のサテンは黒く去る
白白白！！白いメゾン往く

アベニウを突っ走ること

即ち美しき日日へと回帰すること

ああ、

そんなことあるもんか

あるもんか

るもんか

もんか

んか

か

.....

〈孕んでいるのは誰？〉

わたしはどのS T Nにおいても

ミラーを覗くことを禁じられた

私の眼光は悪魔のように充血し

私は殆ど貧血症状であり

あのグリーンハウスの上に

いつの朝か死んでいるのではないかという

戦慄が駆け巡る

駅前交番で幻覚を齧ること

私は弁解するだろう

極めて非哲学的に

都市を孕ませる者を搜索することに比喻して

(なぜなら)

太陽は健康的に病気をしています

あなたの脳細胞上を這い回るカタツムリは

相対的に病気はしている

しかし健康そのものだ、という意味で。

霧は次第に色を変え

都市は結局諦めて横たわるだろう

あなたの目覚める頃

あなたの寢息の上に
インサートするとき
夢という夢は引きずり
墮ろされるだろう
(どうしても)

ナイーヴな欲情

六月の晴天には黄金の欲情
伸長する緑陰並は欲情する
ベージュはラメールの舌でから廻る欲情
ベージュはプラザ²を硬貨の穴に映して欲情する
ドグマ5-----ナイーヴな欲情
テニスコートの空中曲線
白い垣根の倒錯直線
都市エリアのレール平行線
ズームアップはムサシノ快速線
崩れ去る太陽の塔、内面の螺旋光る、硝子のエデン
晴天は晴天六月は六月路面は欲情しています
溢れ出ない水面、揺るがない水滴
サンビームは無数直線に開花する欲情
(わたしはきみと光の街路を彷徨いましょう)
しかしきみはきみじやない単なる欲情
港の见えない丘に登って出発しましょう
ラセン都市へ！
何もかもが昇天する透明のラバースコンチェルト
鳴くのです、泣くのです、啼くのです！！！！
ナイーヴな欲情、奔走する断章
告！！わたしは逃げ隠れできないイマジネーション
あらゆるブルースカイの下の自画像たち
彼等の空っぽの内面では球体が増殖していきます

あ、あれ、あれは、変形な球体という欲情
ルート・フリジドの白い陰核という名の欲情
パルチザンの埋葬した哀しいポロネイズでも聴きながら
編み物でもお料理でもSEXでも致しましょう

(あなたは光の街路を彷徨いましょう)

勿論、耀く肉を暴露け出し

ロジネスピンクの自由の賛歌を振り乱して

ああその豊穣の印章を波打たせ

激昂する肉胎を息づかせ

忌まわしい陰部は削ぎ落としましょう

何もかもがナイーヴな欲情！！

あの、あの、あの、あの、

銀色に欲情する空中都市を犯すのです

退屈な教育者の腐った口蓋へと

叩ッ込メ！！

それには、バリアは融解せねばならぬ

バリアはバリアでしかないという日常を！！

バリア、バビビブベボボ、没々々々々々！！

(エピローグ)

舟は航海しただろうか。その舳先をあつ錆びた太陽に向けて。

そしてそれは終わったのだろうか。蒼い地帯を振り返るとき記憶は甦るだろう。

この砂丘に佇むとき、波に彫られた砂の刻みは、水の哀しみをうたいその旋律を聴きながら僕は再び出発するかも知れないんだ。今度はあの錆びた太陽に背を向けて。なぜなら僕はもう舵を操作できるんだ。そして唱うだろう。蒼い地帯はいつまでも蒼くはないんだ。滅びゆく夕陽を追って漕ぎ出でるようなことはもうしないんだと。きっぱりと背を向けて東の方へ出発するだろう。新しい僕の舟は、新しい海を、新しい太陽を求めて！

